

# 疏水inフォーラム in ひょうご 2010

水がつなぐ人と地域 疏水が結ぶ今昔

## 開催報告



御坂サイフォン



鴨川ダム



加古大池



練部屋分水所

# はじめに

本年度で第5回となる疏水サミット「疏水フォーラム in ひょうご2010」を平成22年7月4日（日）から5日（月）の2日間で開催しました。この疏水サミットは、「疏水百選」の選定を機に、疏水をテーマとして農業水利施設の重要性や多面的機能について市民の理解を得るフォーラムが、美しい疏水を有する地域で平成18年度から開催されてきました。

兵庫県においては、数多くのため池と水路網が一体となって水のネットワークを都市住民や若い世代が支える保全活動も広がりを見せており、このような取組を広く発信し、活動の輪を広げていくことを目的として開催しました。今回のフォーラムでは「水がつなぐ人と地域 疏水が結ぶ今昔（いまむかし）」をテーマに全国から450名の参加を頂き盛大に開催することができました。

この報告書はオープニングアトラクション、兵庫県立農業高等学校演劇部による演劇「水をもとめて」～過去から未来へつなぐ思い～、第1部鼎談「水ネットワークの再発見」、第2部「循環する水の路」についての内容を紹介しています。また、2日目の現地研修、東播磨コース、北・西播磨コースも紹介しています。

今後、全国の疏水が国民にしたしまれるとともに誇りを持って地域で守り育てられ、次の世代に引き継いでいかれることを願っています。

最後になりましたが、兵庫県で開催しました疏水フォーラムの運営に当たり、ご支援、ご協力を頂きました関係機関の皆様に心より感謝とお礼を申し上げ、報告とさせていただきます。

平成22年 7月

疏水フォーラム in ひょうご2010実行委員会

# 目 次

はじめに	1
疏水フォーラムの概要	3
フォーラム	4
オープニングアトラクション	5
開会のことば	6
挨拶	8
来賓挨拶	10
第1部 水ネットワークの再発見	12
第2部 循環する水の路	31
閉会挨拶	55
情報交換会	56
現地研修	57
(参考資料)	
実行委員会委員・幹事名簿	62

## ◆概要

### ◆開催趣旨

近年、地球温暖化の進行や地球規模での気候変動に伴う大規模な干ばつの発生により世界の食料供給は不安定となっており、将来にわたり食料を確保するためには、作物の生育に必要な農業用水を守り続けることが重要であると考えます。

とりわけ兵庫県の南部では、全国でも有数の雨が少ない地域で、農業用水を確保するため、先人の苦勞により、川から水を運ぶ疏水や多数のため池、水路が一体となった水のネットワークを構築しています。

このような水のネットワークを保全する活動は、ため池を中心にその上下流を結ぶ施設全体へと展開されつつあり、近代化産業遺産の認定や重要文化財の指定を受ける動きへと広がりを見せています。

また、良質な農業用水を保全するためには、水源となる森林の果たす役割を下流域の農家だけではなく、流域に住む国民全体の理解を深めなければなりません。

本フォーラムは、都市住民、次世代の若者も参画し、循環する水のネットワークを地域の貴重な資源として未来へ引き継ぐ人のネットワークづくりをめざして開催します。

### ◆テーマ

「水が<sup>いまむかし</sup>つなぐ人と地域、疏水が結ぶ今昔」

### ◆開催日

平成 22 年 7 月 4 日（日）、5 日（月）

7 月 4 日 疏水ネットワーク総会、フォーラム、情報交換会

7 月 5 日 現地研修

### ◆フォーラム会場

兵庫県公館（神戸市中央区下山手通 4 丁目 4 番 1 号）

### ◆参加者

フォーラム：450名

現地研修：88名

### ◆主催等

主催：疏水フォーラム in ひょうご 2010 実行委員会

（近畿農政局、兵庫県、全国土地改良事業団体連合会、全国疏水ネットワーク、兵庫県土地改良事業団体連合会、東播用水土地改良区、兵庫県淡河川・山田川土地改良区、兵庫県東播土地改良区）

後援：神戸市、三木市、稲美町、加古川市、明石市、小野市、加東市、たつの市、太子町、兵庫県揖保川岩浦土地改良区、サンテレビジョン、ラジオ関西、神戸新聞社、兵庫県農村振興技術連盟、兵庫県各地域農地・水・環境保全推進協議会、兵庫県ため池等整備事業推進協議会、いなみ野ため池ミュージアム運営協議会、兵庫県森林組合連合会、社団法人兵庫県緑化推進協会、NPO 法人ひょうご森の倶楽部、灘五郷酒造組合

## ◆フォーラム

### ◆オープニングアトラクション

演劇「水を求めて」～過去から未来へつなぐ思い～

兵庫県立農業高等学校 演劇部

### ◆開会のことば

疏水フォーラム in ひょうご2010実行委員会委員長  
(兵庫県土地改良事業団体連合会会長)

西村 康稔

### ◆挨拶

兵庫県知事

井戸 敏三

### ◆来賓挨拶

農林水産省農村振興局次長

齋藤 晴美

### ◆第1部 水ネットワークの再発見

鼎談「水ネットワークの再発見」

東京農業大学農学部バイオセラピー学科教授

林 良博

兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科教授

中瀬 勲

写真家 大阪芸術大学写真学科教授

織作 峰子

### ◆第2部 循環する水の路

ナビゲーター：兵庫大学教授 ため池研究所所長

池本 廣希

映像「未来への遺産 ～美しい稲と人をつなぐ水物語～」

講演「東播磨からのメッセージ ～つながりめぐる水のみち～」

いなみ野ため池ミュージアム運営協議会会長

玉岡 かおる

読書感想文表彰・朗読

明石市立 魚住小学校5年

今岡 春

講演「疏水とため池 ～いなみ野の水利システムの今昔～」

兵庫教育大学大学院准教授

南埜 猛

### ◆閉会挨拶

全国土地改良事業団体連合会専務理事

佐藤 準

◆オープニングアトラクション

演劇「水を求めて」～過去から未来へつなぐ思い～

兵庫県立農業高等学校 演劇部

兵庫県南部のいなみ野台地を舞台に、疏水建設にかけた人々の想いや、疏水により地域農業が守られていることを伝える。



## ◆開会のことば



疏水フォーラム in ひょうご2010実行委員会委員長  
西村 康稔

どうも皆さん、こんにちは。ただいま御紹介をいただきました本フォーラムの実行委員長、水土里ネット兵庫の会長を務めております西村康稔でございます。本日は日本全国各地から、兵庫県内各地から多くの皆様が御参集をいただきまして、本当にありがとうございます。心から御礼申し上げたいと思います。

そして、ただいまは農業高校の生徒さんたちによる、すばらしい劇、私、期待していた以上にすばらしくて、初々しくて感動的で、水利やため池、米づくりの歴史、あるいは地域とのかかわり、特に、この瀬戸内はため池が多いわけでありますので、身近なところにため池があって、生活の一部になっている、そんな思いを生徒たちが込めて、演じてくれたものと思います。お楽しみいただけたと期待をしたいと思います。

本日は、「水がつなぐ人と地域 疏水が結ぶ今昔」、これをメインテーマにいたしまして「疏水フォーラム in ひょうご2010」を、ここ兵庫県公館におきまして開催いたしましたところ、たくさんの皆さんに御参集をいただきまして、心から感謝申し上げます。

御来賓として、農林水産省から農村振興局の齋藤次長、県からは井戸知事、多くの皆様方、御臨席をいただきまして感謝申し上げます。

疏水百選の選定を機に始まりました、このフォーラムであります。ことしが節目の5年目、5回目を迎えました。本県にとりまして平成7年の阪神・淡路の大震災から15年を迎える、この年に、全国から多くの皆様お集まりいただきまして、復興を果たしました、この神戸の地、兵庫の地を訪れていただきますことを改めて御礼を申し上げる次第でございます。

この開催に当たりましては、疏水ネットワークの生みの親であります林座長を初め国、県、市、町、そして、全国の水土里ネット、学校関係、その他多くの皆様に御指導、御協力をいただきましての開催でございます。あわせて御礼を申し上げたいと思います。

先ほどのお話にもありましたが、この兵庫県は五つの地域、摂津、播磨、但馬、丹波、淡路に分かれまして、北は日本海から南の太平洋までを広い、広大な圏域でございます。いわば日本の縮図ともいわれる地域、県でございます。そして、瀬戸内の気候で、非常に雨が少ないことから、先ほどのお話のとおりため池がたくさんございます。全国21万のため池のうち兵庫県、約2割の4万強、そして、私の地元であります淡路島に、その半分の2万強ですね、約1割のため池がございます。先人たちが農業用水の確保のために数多くのため池や疏水をつくりまして、複雑で高度な疏水ネットワークを築き上げてこられたわけであります。

そして、このシステムは東南アジアを初め農業振興に対するモデルとして生かされているわけでございます。

本県の水をめぐる開発は明治から大正、昭和と続き社会の発展とともに急激に進んだわけであり、先輩たちの御苦勞と、現在も続く各地域での維持活動、今も農村社会を支える大事な宝物であります。

本日のフォーラムが、これら貴重な財産を国民の皆さん、県民の皆さんに再認識していただき、稲穂の国である、この国の成り立ちを大いに議論していただくいい機会になればなど、そんな思いで開催させていただきました。

本日は、初めに水に関する専門家の皆様による鼎談、そして、次に県内の代表的な疏水であります淡山疏水をテーマとして、研究者の皆様、あるいは作家の皆様、そして、子供たちの参加も得て、それぞれの疏水に思いを馳せるメッセージをいただく2部構成で進めてまいりたいと思います。

そして、フォーラム参加者の皆様の総意で疏水の価値や今後の活用に関する兵庫アピールを発信できればと願っておりますので、それぞれのお立場で、御発言いただく機会がございましたら、ぜひ、いろいろな御意見をいただければと思います。

また、ここの終了後は、場所を移しましての情報交換会、あしたは、この地元の現地を御見学いただく二つのコースを計画いたしております。それぞれ限られた時間でありましても、皆様にとって意義深い会になりますように御祈念申し上げたいと思います。

結びに、厳しさを増す農業環境、農村環境でありましても、地域を守り、そして、はぐくんでくれました水を大切に生かす社会であり続けますように皆様方の御健康、御健勝をお祈り申し上げ、開会のあいさつとさせていただきます。

本日は本当にありがとうございます。どうぞよろしくお願いたします。

◆挨拶



兵庫県知事  
井戸敏三

皆さん、こんにちは。疏水フォーラムを開催しましたところ、こんなに大勢の方々がお集まりいただきまして、まず、心から歓迎を申し上げたいと思います。

この公館が、これだけいっぱい埋まりますのは、久方ぶりじゃないかなと思います。

今年は、あの阪神・淡路大震災から15周年でありましたので、あの15周年の式典のときは、まさしくいっぱいでしたが、これだけの皆様に集まっていたこと、何回あったかなという、本当に大勢の方がお集まりいただきました。それだけ水に対する関心が深いということではないかと思います。この1カ月ぐらいの間に心配をすることが何度かありました。昨日も、実を言いますと心配をしておりました。兵庫もそうでありましたが、大雨警報が出たり、注意報は関西全域に出ておりました。水というのは今の演劇でありませんが、米や農作物を育ててくれる不可欠なものではありますが、一方で我々にとりまして自然の力を示す非常に強い脅威でもあります。

去年の8月は御承知のように兵庫県の西部を中心にゲリラ豪雨に見舞われまして、大きな被害をもたらしました。今年の梅雨の間ですが、しとしとと降る従来の梅雨のイメージではありませんね。時間雨量40ミリとかいうような大雨を降らしたと思うと、途端にまた、さっと止んでみたりと、いうように、非常に局地的、一時的な雨が来ている。大変厄介な状況が出てきているなど、こう思っております。

昨年の水害のときにも調べてみましたが、流木と土石流の被害がかなりございました。流木がどうして、そんなに多く流れ出たのかといいますと、やはり山の管理が悪い。つまり杉、ヒノキの人工林、これ間伐等の手入れをせずに、40年ぐらいたっているんです。非常に細い林になり、枝打ちをしていませんから頭でっかちになり重たい、風雨が吹きますと、すぐ倒れる。倒れると根っこのところに水がたまって、その根っこのところの水と一緒に流木となって、土石流といっしょになって出てくると、こういう現象が生じます。従いまして、山の管理を徹底しなくてはならないということで、6年前に台風23号の被害がありましたので、県民の皆様へ一世帯800円、県民税の均等割に超過課税を乗せまして負担をいただいている。企業にも均等割の1割の上乗せをして財源を確保して、災害に強い森づくりというのを進めてきておりました。災害に強い森づくりを進めてきているところは、去年の災害にもほとんど被害を受けておりませんでした。ということは、人が手を加えれば自然はちゃんとこたえてくれる。強い保水力や、あるいは強い防災力を発揮してくれるということであることを改めて確認をさせていただきましたので、これからも災害に強い森づくりをきちんと進めていこうと考えているところでございます。

あわせて、ため池を中心とするため池文化という発想が出てまいりました。今までは農業利水の施設とだけ受けとめられていた、ため池であります、それはオアシスじゃありません。周辺地域の憩いの場にもなるし、あるいは、ため池自身が自然の宝庫でもあります。したがって、そのため池をつなぐことによって、ため池ネットワークをつくり面的な広がり、あわせて人々の生活に潤いを与えてくれる、そのような施設であるという認識が高まり、ため池ミュージアム構想というような構想も進めているところでございます。

西村会長からのお話にもありましたように、兵庫県はため池が4万3,000もある。そのうち2万1,000が淡路、東播磨で1万、阪神間で9,000台、というような分布でございますけれども、ため池をそれだけ活用してきたということは、水を有効に使っていこうという先人の知恵だったと思います。その先人の知恵を、これから私たち、ともに育てていく必要があります。国の事業で農地・水・環境保全事業というのが行われておりますが、兵庫はため池が多いということもございまして、全国一の活動実績を上げてきております。これも水を大切にしていこう。そして、農作物の生産基盤として生かしていこうということのもとより、自然と人との共生空間として整備をしていこう、守り育てていこうということに、地域の方々が力を入れていただいているということなのではないかと思っております。

あわせて、もう一言だけつけ加えさせていただきますと、兵庫の場合は二種兼業農家が非常に多い、そういう特性を持っています。農業だけというよりは農業以外での働き口がたくさんあって、それをやる。働きながら農業をやっている方が多いということなんです、だからこそ地域が一まとまりになりまして、そして、農業を役割分担しながら進めていく、集落営農が大事だということで、この農地・水・環境保全事業とあわせて集落営農に進んでいくようにということで推進を図らせていただいております。

単に地域の環境を守るだけではなく、そこをベースにしながら兵庫らしい農業を展開していこうという試みでございます。この辺に対しましても、ぜひ御協力をお願い申し上げたいと存じます。

ともあれ、きょうは疏水やため池に関連して大変幅の広い御議論を展開していただける素晴らしいフォーラムでございます。そのような意味で、これがさらに人と自然との共生を進めていく大きなステップにつながりますことを心から御祈念し、あわせて、あすは現地視察をしていただくとお伺いしております。兵庫らしい農業の展開をしている状況を見ていただきまして、御意見や御指導を賜りますれば幸いです。

きょうお集まりいただきました皆さんに心からの感謝と、ますますの御活躍を御祈念申し上げまして、地元としての歓迎のごあいさつにさせていただきます。ありがとうございました。

## ◆来賓挨拶



農林水産省農村振興局次長  
齋藤晴美

皆さん、こんにちは。御紹介いただきました齋藤でございます。「疏水フォーラム in ひょうご」西村県土連実行委員長の御出席のもと、それから井戸兵庫県知事、御出席のもと、このように盛大に開催されたことを心からお喜び申し上げたいと思います。

また、日ごろ農村の振興、それから、農業農村整備事業の推進につきまして一方ならぬお世話になっております。高い席ではございますけれども、厚く御礼を申し上げたいと、このように思います。

政府では新たな食料・農業・農村計画をつくりました。食料自給率50%を掲げまして、それに基づきまして各界の政策を、今、一生懸命展開しているところでございます。農業農村整備の分野について申し上げますと、農業用水は農業生産力の源ですので、今後、農業生産基盤をきちり保全し確保する、そういったことが非常に重要となります。そのための施策をいろいろと見直しするということしております。

具体的には水を、限られた資源を有効に活用する。もう一つは水利施設の機能を、いかに保全するかということかと思えます。これまでは新たにつくる、それから、少し古くなると壊すと、そういうことをしておりましたけれども、これからは、いかに施設の機能保全をするか、監視、機能診断、修繕、そういったことを日ごろからきちりやっていると、そういう抜本的な改革に取り組みたいと、今、考えておるところでございます。

世界の食料とか農業用水に目を転じますと、今年の5月にFAO、国連の食料農業機関が2050年に今の農業生産量の1.7倍を目指すと、このように言っております。また、政府間パネル、気候変動に関する政府間パネル、ITCCは、今後、大規模な気候変動が予想され、それが食料とか農業生産にも大きな影響を与える、そういうことを言っております。また、干ばつということが今、話題になっております。中国の雲南省で、今年の秋ごろから全然雨が降らないということで770万ヘクタールぐらいの農業被害があるのではないかと、このように言われております。

また、3年前に食料価格が、特に穀物価格が高騰しました。これは例えば中国の食料需給が非常に逼迫しているとか。それから、バイオマスに農産物を振り向けるとか、いろいろと言われておりますが、もう一つ大きな要因というのは干ばつです。オーストラリアでは、かなり干ばつが激しくて、例えば、メルボルンというのは、今年の1月、日本でいうと真夏になるんですが、たった1ミリ、気温が46度というような異常気象で干ばつに見舞われております。また、南東部のサースベルクではですね、約半分の農地が干ばつに見舞われている。これが今後、雨が降らなければ、さらに甚大な被害を及ぼすだろうと、このように言われております。そういう中に、こ

ういうシンポジウムを開催するという事です。

我が国の農業水利というのは、先人の知恵と汗、涙の結晶で今のような豊かな水社会が築かれまして、まさに食料の安定供給のみならず生活用水であり、美しい景観を提供し、また、生物多様性の保全にも寄与しているということで、非常に大きな役割を果たしている。でも、それは単に一人の先人が頑張ったからとか、そういうことではなくて、やはりそこに暮らしていた地域の住民の方々、すべての力の結晶ではないかと、このように思います。

先ほど井戸知事が農地、水、環境保全向上対策のことをおっしゃいました。これは農水省、力をかなり入れてやっております、全国で140万ヘクタール、農振農用地の3分の1が、これでカバーをされると思います。兵庫県は、知事さんが、先ほどおっしゃいましたが、全国のカバー率、それから協定の中で活動の数、これが全国一ということで大変注目をされています。

しかし、私は単に面積が多いとか、好評を博しているからということではなくて、やっぱり意味があるんだろうと、このように思います。といいますのは、先ほど疎水の話をしました、それはとりもなおさず、やはり私は地域コミュニティということではないかと、このように思います。

きょう、中高年の方も多く来ていらっしゃるんですが、私もその一人ですが、四、五十年前というのは、みんなで農作業を行いました。例えば隣近所の田植えとか、稲刈りをお手伝いする。今度、反対に親戚の方が来て、まさに無償の行為ですが、一緒に農作業を行うと。田植えの後には、さなぶりといって、一休みしてみんなで骨休めをする。秋には収穫を祝って近所とか親戚が集まってお祝いをする。まさに地域コミュニティが醸成されてきた。

農地、水というのは、今平成の世に、失われたものを復活すると、まさに国の復活だと、こう思いますが、それをやり始めている。つまり日本人の心の中にもともとあったもの、四、五十年前にあったものを今、この平成の世に火をつけているということでもあります。それは何といても、やっぱり心地よいということではないかと、このように思います。

疎水の意義は、やっぱり食料の安全供給というのと、地域コミュニティの再生ではないかと、このように思います。このような時期に、この神戸の地で、このように多数の方がお集まりになって意見を交換する、発表する、発信すると、非常に時宜を得た、非常に意義深いものではないかと、このように思っております。いろいろと御発表とか何か、講演があるかと思いますが、そういったことを通じて全国の疎水のネットワークの輪が広がり、強化され、食料の安定供給と、それから地域コミュニティの再生、創造につながればと、このように願ってやみません。

きょうは本当に心から御祝い申し上げたいと思いますし、この後の先生方のお話に期待したいと、このように思っております。

本日はまことにおめでとうございます。

## ◆第1部 水ネットワークの再発見

### ◆出演者プロフィール



林 良博氏

(東京農業大学農学部バイオセラピー学科教授)  
広島県生まれ。富山県育ち。1969年東京大学農学部卒業後、ハーバード大学客員研究員、コーネル大学客員助教授などを経て、1990年東京大学教授、2010年3月末退任。  
現在、東京農業大学農学部バイオセラピー学科教授、農林水産省「食と地域の『絆』づくり」有識者会議座長、疏水百選の選定委員会座長、食料・農業・農村政策審議会会長。(財)山階鳥類研究所所長・兵庫県森林動物研究センター所長を兼務。



中瀬 勲氏

(兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科教授)  
大阪府生まれ。1972年大阪府立大学大学院農学科研究科農業工学専攻修士課程修了、大阪府立大学農学部助教授、1992年兵庫県立姫路工業大学自然・環境科学研究所教授などを経て、現在、兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科教授、兵庫県立人と自然の博物館副館長、兵庫県立淡路景観学校校長、丹波の森公苑長を兼務。



織作峰子氏

(写真家)  
石川県生まれ。1981年度ミスユニバース日本代表に選ばれ、ニューヨーク大会に出場。ミスユニバース任期中に大竹省二と出会い、1982年大竹省二スタジオに入る。1985・1986年全国二科展入選。1987年独立。女性の優しい視線で世界各国の美しい風景や人物の瞬間を取り続けている。日本全国や世界各地で写真展を多数開催する傍ら、テレビや講演に幅広く活躍中。農林水産省「食と地域の『絆』づくり」有識者会議の委員、疏水百選の選定委員、疏水のある風景写真コンテストの審査委員長、大阪芸術大学写真学科教授。

◆鼎談「水ネットワークの再発見」

林 良博氏 皆さん、こんにちは。

パワーポイントを使って御説明いただくときには必ずしも席にいないこともございますが、基本的には座って失礼させていただきます。

本日は兵庫県で疏水フォーラムが開催されること、本当におめでとうございます。

平成17年に織作さんも委員のお一人でおられましたけれども、選定委員会が行われ、18年に疏水百選が決まりました。5年前になりますが、疏水百選だけではなくて、ため池百選も選ばれた。ため池は、先ほどから西村実行委員長、井戸知事がお話になっておられますように、兵庫県は大変多数のため池を有しておられます。この疏水、そして、その疏水の一部でもあるため池、この百選がそろったところで、兵庫県の地で疏水フォーラムが開催されますこと、本当に意義深いものがあるかと思えます。

これから、私たち3人で鼎談をさせていただきますが、3人とも実は大学の先生をしておりますから、先生という言い方をしてもいいんですけれども、「何々さん」でいきたいというふうに思います。では、一番最初に中瀬さんから、自己紹介をお願いいたします。

中瀬 勲氏 わかりました。よろしく申し上げます。



ですけれども、今から約44年前、ある某大学の農学部農業工学科3期生でございました。そういう意味では、もともと出は農業土木なんです。疏水の話聞いて、ああすごいと思いました。今、働いているところの写真を出させていただきました。①、②、③と書いてありますが、①が淡路景観園芸学校、県立大学の緑環境景観マネジメント研究科、先ほど農水省の次長様が言っておられました、あるものをどううまく生かして運用していくかといったことを頑張っ勉強しているところ、②が三田にございます人と自然の博物館というところで、先ほど井戸知事が言っておられました共生とか生物多様性等々を一生懸命みんな勉強している。③が、ちょっと遠くなって行けなくなったんですが、丹波の森公園でございます。その左横が、林さんがおられる森林動物研究センターです。



- I 淡路:環境立島淡路  
兵庫県立大学緑環境景観マネジメント研究科、淡路景観園芸学校  
緑・環境系で、わが国初の専門職大学院。専門職業人育成。  
園芸学校では、園芸療法、花・緑を通じた生涯学習など。  
キャンパスがフィールド。
- II 三田  
兵庫県立人と自然の博物館、兵庫県立大学自然・環境科学研究所  
思索し、行動し、提言する博物館、生涯学習、全県キャラバン。  
生物多様性の推進、地域活性化(小規模集落)など。
- III 丹波:みんなで丹波の森(環:わ)  
兵庫県立丹波の森公苑  
丹波の森構想の推進(森:山、川、里、集落...全体)。  
地域活性化(小規模集落)。  
三川の源流(加古川、由良川、武庫川)。

私、このフォーラムのお話を聞きましてわくわくしております、実は、先ほど計算したん



て、ちょうど環境省が名水百選をやられたときぐらいです。20年ほど前、一步出してくれたためにやめられたのかですね、それともある、その後、やはり20年ぐらいたってから、もっと大きく、大きな国民の運動としてやろうと考えたのか、どちらかわかりませんが、少なくとも、あのときは農業用水でした。今でも多くの農業用水、疏水は、何々用水というのが圧倒的に、全国的に見ても、兵庫県だけを見ても多いかと思うんです。

何々疏水と言っているところは、やはり数としては、織作さんがおっしゃるように、そんなに多くありませんから琵琶湖疏水とか、ある特定の限られたところしかありませんから、やはり用水のほうがなじみが深いし、もう一つの農業用水との差は、はっきりしますよね、目的が。食料生産のための人や、先人たちがつくり上げた川なんだという、ただ、そのことの良さも限りなく大きいんですけれども、農学部もですね、農学部という名前をかえてしまうと、何をやっているところかよくわからない、何を学ぶのかわからないという、その悪さがあるように農学というように、農をつけたほうが、今でもほとんど大学は、それで頑張っていますけれども、しかし、学科の名称がむちゃくちゃになってきてますよね。それを言ってますと今日は時間が足りなくなりますので、申し上げますが、疏水にしたために、わかりにくくなった部分は確かにあるかもしれませんが、基本的な食料生産のために先人がつくり上げてきたものというプラスアルファですね、現在でも人々の憩いの、あるいは文化、歴史を守るための、そういう存在としてあるんだという広がりや、みんなに知っていただくためには疏水という名前。こういう判断を、あの当時はしたわけですが、織作さんは、そのときに何と思われましたか。

**織作峰子氏** 農業だけではなくて、その疏水自体の使われ方が、例えば、そこに舞台を置い

てお能をやったりとか、それが水鏡になったりするわけですね。それがとても美しいんです。夜なんかですとライトアップされて、そういう場面も見て、これは疏水百選の設定委員になれたおかげなんですけれども、例えば、そこで幼稚園の子たちが遠足で来て、お弁当を広げて食べていたり、鯉が泳いでいたり、それをまた人は見に来ると、人を集客する力があって本当に広いですね、単に農業だけではなくて、本当にコミュニティの場として使われている。

そうすると、何となく農業用水というよりは、ずっと疏水と言ったほうがスマートだなという感じがします。それで正解だと思います。

**林 良博氏** ありがとうございます。

中瀬さんは、どう思われますか。

**中瀬 勲氏** 振りが来るとは思ってませんでした。文化的ですね、用水って非常に機能論的な用語で、疏水というと何か非常に文化的な意味合いということで、よかったです。

**林 良博氏** ありがとうございます。

先ほどから繰り返し県立農業高校の生徒さんが言っておられたのは、私たちは先人の苦勞、偉業を忘れてはいけなと。あるいは、先ほど齋藤次長がおっしゃったかと思いますが再認識する。これは知事もおっしゃっていたことですが、忘れてはいけなと。たとえ忘れていても、もう1回、再認識する。そういう意味合いというのは、この疏水フォーラムの本当に大きな使命だと思うんですが、残念ながら、私は、日本人というのは非常に忘れやすい国民だと思います。ついこの間も、あれだけ日本に食料が入って来ないんじゃないかと恐れた、あれだけ高騰したときに、相当あちこちで騒ぎましたけれども、それを覚えている人というのはどの位いますでしょうか。聞けば思い出されるでしょうけれども、日常的に本当に今、食料危機が本当に世界で、どんな状態で起きているか、イメージすることすら私はできてないんじゃないかという、これが大問題であるかと思いま

す。だからこそ疏水サミットのような試みは、ぜひとも定期的にやっていただく。

これ水土里ネットのほうでは、これで5回目を迎えられ、兵庫県で疏水フォーラムという形でやっていただいたわけですが、ただ、私、忘れっぽいこともいいことだと思ふんです。イスラエルのエルサレムに行きますと、2000年前の恨みだと、こういうふうに行っているのを見ていますと、日本人は忘れっぽくてよかった。あんなことをやっていたら、いつまでも紛争は終わらないですよ。あと2000年ぐらいは続くんじゃないかと思ふんですけども、そういうよさもあるんですが、基本的には、そういう忘れっぽさと、もう一つは日本の中で今、これもぜひとも知事さん、そして議員の皆様方に頑張っていたいただきたいんですが、どんどん一般の方たちの要求にこたえなければならなくなってきましたとですね、悪くいいますと大衆迎合的な方向に、例えば、疏水の、もともと大切な基盤のところを整理するのを、この間、だれかがツルの一声で、あんなものに金を出すなと言ったら、どさっと出さなくなるとか、そういうふうなことが起きている現状は、やはり日本で大問題になる。だから、こういうフォーラムをやって、そんなことではいけない。ちゃんとソフトとハード両方面をきちんと整備していく必要があるんだということも、あわせておっしゃっていただきたいというか、国民の多くの方々に知っていただきたいというふうに思ふます。

私、この疏水が、先人たちが築き上げられた40万キロメートルの延長に及ぶと、いろいろところで申し上げて、常に思い出しますのは、18歳で運転免許をとりまして、今63歳ですので45年間で、あまり車を運転しないせいもあるんですが、全部足しても40万キロメートルになっていないんですね。だから、運転免許暦の中で40万キロメートルは制覇しておりません。それぐらい大きな長い疏水を持ち続け

た日本というのは、大変な国だなという気がいたします。

後から、もうすぐ織作さんに、私バトンタッチいたしますが、今回のフォーラムのために織作さんは取材をされたそうです。写真家でおられましたので、そういう写真を撮って歩かれるのは御専門だと思いますが、朝来町長さんが織作さんを招かれた、朝が来る町だから朝来町、違いましたか。

**織作峰子氏** 朝来、今は朝来市ですけども、なぜか私のところに町の写真を撮ってほしいという依頼が、どうして私なんですかと聞きましたら、そのころはまだ、ホームページ、こういうパソコンが蔓延していないときなのに、日経のデータベースでも朝と写真家をたたいたら私の名前が出てきたということで、本当のきっかけは、すごくひよんなことで、それで私が朝来市を訪れて、まず、最初に感じたことは何もない町だなということです。何もないというのは、これはいい意味で、今どこでも何かゴルフ場があったり、田舎のほうへ行きますと、大体パターンが決まるんですけども、本当に何もなくて、ただ一つ、私の中で印象に残ったのは、植物の色が濃かったということなんです。あぜ道に咲いている、本当にちょっとしたシバザクラとか、ヒマワリとか、本当に色が濃いという。やはり土も水もいいんだろうなと思ふて、そして、入っていくうちに井上さん、きょうもいらしてますけれども、市長がですね、非常に文化芸術に力を入れていらっしゃいます。それでほれ込んで、私も入り込んだんですね。

それで軽トラックを買いまして、カメラを片手にずっと田んぼ道を回って、谷から谷へ行きながら、大体三日、四日滞在しながら、本当に植物とともに過ごすことが、春夏秋冬と年間4回ほどね、訪れているんですけども、すばらしいなと思ふております。

そんなきっかけで来たんです。

**林 良博氏** きょうは、その写真も見ていた

だけるんですか。その写真はないんですか。きょうは特別取材された写真と、それから。

**織作峰子氏** 持ってくればよかったです。朝来の写真、すみません。

**林 良博氏** それと、この疏水百選のときに、選ばれた写真をお見せいただきながら、この疏水についてお話いただけるということなのです。

**織作峰子氏** 朝来は皆さん、近いですから、いらしてください。でもきょうは全国からいらしてますよね。

**林 良博氏** それではあしたの視察といいますか、見学の後にもう1泊していただいて、朝来で。もう5月にはサクラの写真がありました。これ織作さんが全部撮られた見事な写真でありますけれども、また、別の写真が出るとは思います、大変すばらしいところですので、ぜひ一度見ていただきたいとします。それでは、織作さんは外国の取材も随分されておられるんです。

**織作峰子氏** そうですね、主に外国のほうが多いのですが、私も、この疏水の仕事をさせていただいて、それからの意識ですから、あまりたくさん撮っていないんですけれども、水辺の美しい風景が二、三ありましたので、それをちよときょうはごらんいただいた後に、先日、取材をさせてもらいました呑吐ダムとか御坂サイフォンのほうの写真も、ただ、もう二、三時間でぱっと回ったものですから、あまり期待なさらなくてください。ベストタイミングで、私は行っていませんので、申しわけないんですけれども、参考までにごらんいただきたいとします。

**林 良博氏** それでは、写真を見ていただきながら、織作さんのお話をお聞きいただきたいとします。

**織作峰子氏** これはニュージーランドなんですけれども、やはり水辺の利用というか、子供たちがつくった、ああいうモニュメントを水

辺に浮かべているんですが、ちょうど2月はニュージーランド、花祭りの季節です。



いろいろなところに、こういうふうにはぼこぼこ手づくりの花のモニュメントが浮かんでいるわけですね。これはどこかの幼稚園がつくったものだったと思います。



次の写真が、こういうふうに、その横を観光客がゴンドラでずっと渡っていくというところですね。絶対水がきれいじゃないといけないんです、こういう場合、においがするような川ではいけないですし、水路ではいけないですし、こういう池があったり。

その次はスイスなんです。ここのところ6年間で、8回スイスに行っています。



年に2回ほど行っておりますけれども、先日、写真集を出させていただいたんですけれども、この農業用というか、スイスは山、アルプスが連立している非常に水資源が豊かなところで

すので、水というのはあって当然のような、エネルギー資源としても非常に有効活用されているんですけども、護岸工事をしていない川とか水路を見るとほっとしますね。ただ、日本は山から海までが短いですから、そういうわけにもいかず、こういう風景を見ながら、それでもうちよっと思つくと放牧地が下のほうにありまして、牛などの水場があったりとか、畑などに分かれていくわけなんです。というヨーロッパの写真から、次は先日、取材した、これが呑吐ダムですね。



次の写真は呑吐ダムから流れ出る水源がずっと流れて脈々と眼下に広がる台地、田んぼのほうに注がれるわけなんです。



こういうふうにならばちょうど先月、田植えの前、直後ぐらいでしたか、非常に雄大な印象を受けましたし、これだけ見ていると水が、そんなに豊かじゃないというのを全く感じないほどのあれなんですけれども、やはりダムができて、水をちゃんと確保して、ため池ができて、そして、こういうふうにならば前なんですけれども、毎年、毎年、お米がいただけるということなんです。



これは、かの有名な御坂サイフォンで疏水百選に必ず登場する水路橋ですね。

この御坂サイフォンに落とすための、これがまた、ずっと永遠ではなくて、時々変えないと錆びたりとか、いろいろな問題が起きるといって、大変だと思いますが、うっそうと木が茂っ



ちゃって、なかなかずっと一直線に撮れる場所がなかったんですけれども。



練部屋分水所ですね、ちょっとこれもですね、この次の写真もそうなんですけれども、割と疏水百選の中に出てくるものに比べると、ちょっとお地味な感じなんですけれども、それでも、ずっとこれから水が注がれて、その次の写真、これはおもしろいと思ったんですけれども、その水路が満遍なく、いろいろな田んぼに行くように途中で割り振られているわけですね。



この辺がきれいな幾何学模様をしていて美しいなと思いました。

次が加古大池ですね。



ここは、マラソンやジョギング、歩いていらっしゃる方、たくさんいらっしゃいました。やはりここ、人々の憩いになっているんだと、この前、行ったときは一人だけ、こういうふうに



レジャーを楽しんでいらっしゃいましたけれども、結構水もきれいですね、皆さん、こういうふうに泳いだり、楽しんでいらっしゃるんだというのが解りました。

続いてが天満大池、アサザという天然記念物の植物が左のほうに、朝に黄色い花を咲かせるということで、私が伺った午後は、もう花がなく



て、ちょっと閉じちゃっていたんですけども、こういう広大なため池があるというのは、私は知らなかったです。このあたりは酒米でも有名な地域ですので。この前、加東市という町の、写真の審査に伺いましたときに、いろいろなお話を聞きまして、このため池なんか、非常に重要なものになっているという話を伺いました。酒米というのは酸っぱいんですってね、味が。酒米しか、小さいとき食べさせてもらえなかったって、その農家の方が、それで居酒屋さんで食べた白米がびっくりするぐらいおいしかったっておっしゃってましたけれども、その地域、その地域ではぐくまれてきた、いろいろな特徴があるなと思って。

**林 良博氏** アサザですね、あれは。

**織作峰子氏** アサザですね。

**林 良博氏** 本当に小さなかawaii、きれいなお花ですが、あれを生育するためには、あまりきっちり護岸してしまうと風が吹くと波が打ち寄せてきて、かえります。そういった大きな波にはものすごい弱い植物なんです。

**織作峰子氏** そうなんですか。

**林 良博氏** そのためにはいろいろな工夫があって、ここではどのようにされているか解りませんが、例えば森林組合さんと一緒になって、間伐材を筏に組んで浮かべると、波を静めます。それでアサザが生育というか、そういうのは、もう中瀬さんのお得意のところじゃないですか。

**中瀬 勲氏** 霞ヶ浦ですね、頑張っています。

林 良博氏 このアサザのところは本当に花も小さいです。小さな花ですけども、いい環境だという証拠でもありますね。

織作峰子氏 写真がいまひとつなんで、ちょっと私もいい季節に行きたかったんですけども、何せ、これの直前で、この日しかないということで、晴れただけよかったんですけども。

続いてはですね、私が選ばせていただいています疏水百選で上位入賞されたいい写真が、これから続きます。

立梅用水、これは三重県の松阪市にあるんですけども、非常に豊かな水源地だと思います。



これ季節もあるんだと思うんですね。ちょうどやはり時期によって彼岸花が咲いてますね、左のほうにね。

続いては、岩見用水ですね、兵庫県たつの市ですね、地元ですね。この写真を選んだときに、これとまたそっくりな写真を次の年に出してくるんです、ワンコを連れて。もう選びません。



1回しか。やはり日本人はどうしても笑いほしさに、これ、こういうふうになれば入るだろうということで同じシチュエーションで、何か違う

犬、種類でしたけれども、でも私が感じたのは、今年もきれいでよかったなというのを意識しました。とにかくこういうふうにならなくて、きれいな用水が流れていて、後ろのほうに田んぼの稲穂にね、黄金の穂をつけているという、とてもどこかいい風景だと思いますね。

林先生、大丈夫ですか。

林 良博氏 いや本当に私はワンコだと何回も選ぶかもしれませんが。

織作峰子氏 その次の年は洋犬だったと思いますね。

次は濃尾用水、これは愛知県の岩倉市です。



これ絵を書いていますね、子供たちが、こういうのどかな景色、すばらしいと思いますね。

続いて、金山大堰、山形県の金山市です。たくさんの鯉が泳いでいますね。

続きましては、これは御存じの方、多いと思います。伏見疏水、京都市ですね。



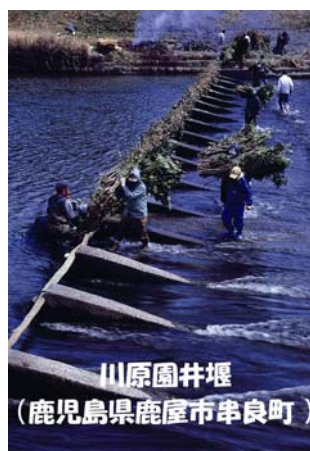
伏見区の酒蔵が見えております。本当に、ここも何年前ですかね、こういうふうにきれいに美しくされたんですけどね。

続いて、熊本県の通潤橋、通潤用水、もうこれは本当によく見る代表的な、これはもう観光地のようなものでしょうね、ここまできますとね、これだけ人がたくさん訪れています。



この水を見にやってくるという、ここまですれば、人がいますね。単なる疏水というだけではなくて、人を、ここまで集めてこられる何かパワーとか、きちんといろんなところを整備もなさっていらっしゃると思うんですけどもね。ここでやっちゃいけないのは、お土産屋さんを出したりしちゃいけないんですね、あんまり。外国ですと、あんまりそういうことはしないです。日本はすぐに横にお店をつくってしまう、そして、入場料を取ってということになるんですけども、こういうふうの人が集まってくるということは本当に素晴らしいことです。

続いて、川原園井堰、これは鹿児島県なんです。これおもしろいのは、堰のところに水量調整を、木のソダっていうんですか、それをこう、あれも昔的な手法でしょうね。それちょっと珍しい写真なんです。



中瀬 勲氏 これは板を入れておられるんですか。

織作峰子氏 手前は板、それにひっかけるようにして、ああいう何か自然のものを使うというのはいいですよ。

中瀬 勲氏 いいですね。

織作峰子氏 続いて、西鬼怒川東岡本統合堰という非常に長い、これはちょっと写真では見にくいんですけどもね、下のほうに美しいミズ藻が、白い花を咲かせているんです、これは何の花でしょうか。



中瀬 勲氏 わかりませんが、バイカ藻と違いますか。

織作峰子氏 バイカ藻、これは水がやっぱりきれいだからでしょうかね。雲の形もいいですし、写真のコンテストなので、ある程度、フォトジェニックな場所というか、角度も大事になってくると思います。

続いては、滋賀県東近江市、近くですね、きらきらと水面が輝いています。鯉もうれしそうに泳いでいますね。



続いて、これなんですニの堰親水公園、山形県、こういうふうには水鏡といいまして、水に映っていますね、そう

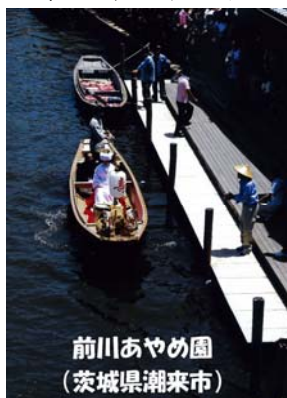


いうのはとても情緒があって、そこで能をやったりとか、何でもいいんです、みんなで観覧しながら数時間を過ごすという。ほかに、こういうところあるんでしょうかね。

**中瀬 勲氏** これ舞台ですよ、今、おっしゃられたリフレクション、水鏡というのは、ものすごい大事ですね。私は後の話題にも出します。

**織作峰子氏** そうですか、じゃあ楽しみにしております。

続いて茨城県潮来市の前川あやめ園、結婚式でしょうかね、花嫁さんが見えますけれども、こうなると疏水というイメージではないんですよ。



前川あやめ園  
(茨城県潮来市)

**林 良博氏** 恐らくこれも、さっきの鯉が泳いでた、あれは生活用水とっていいんでしょうけれども、やはり疏水、そこまで含めて疏水ですから、結婚するときに花嫁さんが馬に乗ったり、船に乗ったりして嫁いでいくというのは、これはやはり疏水の持っている力ですね。

**織作峰子氏** ですよ。ですから、疏水ということで、やはり考え方というか認識を新たにしました。

続いて、これちょっとね、長い名前なんですよ、西谷取水井出水路種子川取水口という非常に長い名前が愛媛県ですね。



西谷取水井出水路種子川取水口  
(愛媛県新居浜市)

子供たちが楽しそうに水浴びをしているんですけども、本当にこういう人が集まって、子

供たちが楽しく遊べるというのはすばらしいなと思いますけれども。

続いて、冬場に撮りました。これ私も行ったことがあるんですけども、前川仮屋用水、福井県ですね、この写真には写ってないんですけども、ここでは、



前川 仮屋用水 (福井県若狭町)

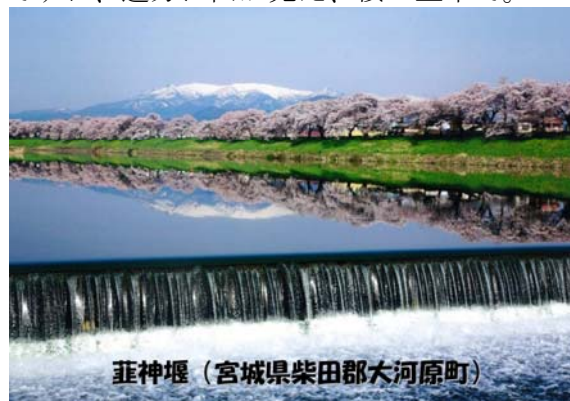
お芋、里芋を、この川のところにむく機械があるんですよ、木でできた。ころころころころ水車のように回転して芋の皮をむいていくという、それを私は写真に撮ったことがありました。生活の知恵をね、うまく疏水を利用して生活の知恵を出していらっしゃるなと思いました。

続いて、これは最も新しい作品で「しらみず」ダムでよろしいんですか、「はくすい」ダムですね、白水ダム、大分県、これは何度か見てるんですが、今年の作品が一番ダイナミックでよかったですね、人間の身長に比べて、この水が落ちる高さってすごく高いというのが解るんです。非常にダイナミックで何か涼しさが伝わってくるような、そんな写真でしたね。



白水ダム (大分県竹田市)

そして、葦神堰ですか、宮城県柴田郡、きれいですね、遠方に山が見え、桜の並木で。



葦神堰 (宮城県柴田郡大河原町)

そして、護岸工事もあんまりされていないか

ら余計きれいなんですね、ということで日本には美しい疏水の風景がたくさんあるなということを毎年、気づかせていただいています。

**林 良博氏** はい、ありがとうございました。

織作さんの写真を見せていただくと、自然の美しさと、それから人工的な美しさが、何かとてもマッチしている感じがしますね。

**織作峰子氏** バランスをうまく考えているものが多いです。

**林 良博氏** ありがとうございました。先ほども井戸知事がおっしゃったんですが、本当に水は私たちに恵みをもたらしてくれる、生き物はすべて、生きとし生けるものは生きていけないわけですが、一方で大変な大水害という言葉があるように災害も、この水、よくよく考えたら水ぐらい不思議な分子はなくて、私たちが日常的に、例えば、昨晚も頂きましたけれども、グラスの中に氷があって、そして、液体としての水があって、その隣では温かいコーヒーを湯気を立てながら飲んでいて、気体と液体と固体が日常的な生活空間で見える物質というのは、ほかにあるのかなと。

**中瀬 勲氏** たいがい固体と気体ですね。

**林 良博氏** そうなんです。この液体部分のドライ見たことないんですね。少なくともほとんどの物質は二つぐらいでおさまっているんですが、液体、固体、気体、全部見えるのは、水というのは大変な驚くべき物質かなと思うんですが、この水についてですね、水だけじゃないんです、これからお話いただきます内容は、中瀬先生は環境との絡みが多いんですが、環境と、それから食料生産なり農業、そういったありとあらゆるものをテーマに、ついこの間、ここでため池フォーラムもやられましたよね、兵庫県で、あのときに基調講演か何かの記憶がありましたけれども、去年ですか。大変な方ですが、中瀬さんもスライドを使ってのお話しになるというふうに聞いてます。お願いいたします。

**中瀬 勲氏** 先ほど織作さんのお話を聞いて

ていまして、一番最初に出てきたクライストチャーチですね、クライストチャーチガーデン・シティ、ちょうど織作さんの一番最初の2枚の写真の川がずっと公園の中を流れているんですよ。いわゆるガーデンシティといわれるところの本当のガーデンなんですね。まさにそういうガーデン、最後のほうで出た通潤橋、熊本県の、あれは農業土木の粋ですね。一種のアーチ状にする。すばらしい風景です。ところがあれは、農業技術がすばらしいからあのようなすごい風景が出来たというようなこともあります。ということで写真が出てまいりましたが。





グーグルからきょうのテーマの、ちょうど加古大池が出ておりますが、一生懸命グーグルでどのスケールがいいかと、作ってきました。

きょうお話しさせていただく時に、今お話がありましたように北播磨田園空間博物館というものすごくいい思いをさせてもらったことがあります。これも農林水産省の補助事業なんですが、当初は水路と農道と田畑しか入れてはいけなと言われてたんですが、兵庫県で初めて自然とか歴史とか芸術的な場所も入れようと、それをサテライトにして地域全体を博物館にしようということで、ひどいときは朝1回、午後2回、夕方1回、現地でワークショップをしながら地域の方々と一緒にさせてもらったこと。加古大池も、先ほど出ておりましたが、加古大池も改修されるときに、一番外だけはコンクリートを使おうよ、内部は、もう使うのをやめようということで、土木の方と農業土木の方と議論したことを覚えております。

ここはすごいですね、水生生物の保護の場所までつくって、いろいろな環境をつくってやっておられます。それから今日、主催されてる方の多くのため池ミュージアムの方とお会いしました。

はい、次にいってください。今日はつなぐ疎水ということです。上流と下流をつなぐ。これも皆さん方、よく御存じだと思いますが、生き物のモクスガニからウナギからアユから、みんなこれつながっているんですね。

**I つなぐ疎水(その1)**





**① 上流と下流をつなぐ(流域の再確認)**

- ・水源の森林(水源)と田畑(農業)をつなぐ。
- ・生きもの(モクスガニ、ウナギ、アユ……)をつなぐ。

**② 地域と地域をつなぐ(地域社会)**

- ・農業の共同体に加えて、地域活性化のためにも。
- ・いなみのため池ミュージアムはため池の保全活用を媒介にした地域づくり。



ということでウナギとアユの写真も入れてきました。先ほどの結婚式の船の話であります、地域と地域をつなぐ、要は農業共同体に加えて地域活性化につながる。まさにこれから議論されるいなみ野ミュージアム、ため池ミュージアムなんかは新しい形の地域のつなぐ形だと思っています。

はい、次にいってください。







**生きものつなぐ:コウノトリ郷公園周辺の緩傾斜水路**

つなぐというので、これは、すみません。東播磨でなく但馬の場合を持ってまいりましたが、県の方が頑張られまして、段差のある水面の面と排水路との間に緩傾斜護岸ではなくて緩傾

斜水路をつくられました。そうすると、この写真のように、コウノトリが喜んでえさを食べに入ると。左側、フナの産卵風景とかモロコです、そんな写真、まさにつながりがあってこそいけるということにつながる水路。


はい、次、二つ目はつなぐ水路ということで、先ほどからいろいろな話がありましたが、人々をつなぎ、地域社会の心をはぐくむ、さらに歴史文化をはぐくむ、つなぐということですね、要は対流とか交流とか人流と言われていますが、要はいろいろなものをつないでいく。

**II つなぐ疎水(その2)**

人々をつなぎ、地域社会を育む、歴史文化を育む。

- ① 対流
- ② 交流
- ③ そして、人流---フットパス

Linking People, Linking Parks  
↓  
(Ponds and Community)



先ほど冒頭、井戸知事もお話されましたが、右側が佐用町の上のほうの若州という地域での小さい谷がそのままずってしまっていて流木となって落ちてきているところなんです、こういったところ辺からずっと下流までも水はつないでいる。よく外国に行きますと、Linking People、Linking Parksがあるんですよ、人々がつながり合うと公園がつながり合う、供用にLinking People、Linking Ponds and Communityと書きましたけれども、人々がつながり合うことによって池も疎水もコミュニティもつながってくるというような、さきに人々がつながるかもしれないなということで、いなみ野ため池ミュージアムにエールを送るところであります。はい、次にいってください。



三つ目の話題、これが最後の話題なんです、共生文化としての疎水、織作さんの写真なんかを見せていただきましたら、まさに機能としての疎水、コミュニティとしての疎水、さらにはもっと言うと文化としての疎水という側面を

### Ⅲ 共生文化としての疏水

① 生産のための疏水  
農業生産

② 環境のため疏水  
生きもの生息の場(ビオトープ)

③ 共生文化としての疏水  
歴史の継承、原風景  
農業土木の施設と仕組み  
御坂サイフォン橋、  
練部屋分水所、加古大池など

感じさせられたと。要は①に生産のための疏水、これ非常に大事な基本的な要素です。二つ目は環境のための疏水、生き物とかの生息の場。三つ目が、共生文化としての疏水ということで歴史の継承、原風景、私自身、冒頭申し上げましたが、ここへ呼んでもらってうれしかったというのは、農業土木施設と仕組み、先ほど御坂サイフォンもございましたが、こういったハード、ソフト、こうものが歴史の継承になってございます。ちなみに右横が私の生まれた家でありまして、あの船は、私の遊び道具なんです。あれに乗ってドブガイとかナマズをつかみにいっていたと。まさに原風景をつくる場でもあると。

上の写真は、これアメリカのシアトルでございますが、彼女たちは筒状に石を入れて川にごみを捨てるなど、川の浄化を住民がやっている写真であります。はい、次お願いします。持ってまいりました。



まさに、これ私、農業土木を、その後、造園にいったんですけれども、要は日本庭園というの

は、まさに水ですね、流れですね。一番右下が、これ多分、歴史遺産に指定されるだろう東北の毛越寺の京都式の庭園です。まさにこれは、私から言いますとため池でございます。左の真ん中が、このすぐ近くの岡山の後樂園の曲水ですね、左下は、これは明治から大正にかけてつくられた無鄰菴の小川治兵衛がつくった流れです。まさにそういう農業用水の水路なんかは、疏水を見ながら新たな造形の意識が出てきたと、この様な越谷付近だったと思いますが、日本風景論という我々の分野で一番オリジナルな文献に書いてある水の風景なんか結構、それぞれ私たちのDNAの中に、こういう原風景とか共生、そういったものがあるのかなという気がします。これで終わりと思いますが、ということをお林さん、考えました、いかがでございましょうか。

**林 良博氏** 子供のころから船で遊んでおられたんですか。

**中瀬 勲氏** すみません。今から思うと、すごいハイソサエティなスポーツですね。

**林 良博氏** 大変な財産だと思うんですが、私たちもどこかに憩いの何か、それに加えておるものがあるとすれば、やはり水との関係なんですけど、やはり疏水が、春の小川もそうですけれども、メダカとりをして遊ぶときにですね、天然の川ではなくて、やはりどちらかといえば、土砂場じゃなくて、圧倒的に疏水でメダカとりをしていたんじゃないかという感じがしますですね。

**中瀬 勲氏** 安全面もありますし、人目もありますものね。

**林 良博氏** 身近にある。だから日本全国でメダカに相当する言葉が、地方名が5,000あるといいますけれども、5,000の地方名ということは、県になおしても一つの県で100ぐらいあるということで、いかに子供たちが遊んでなければ言葉なんて要らないわけですから、そのくらいのことは実際、そのメダカと

の遊びをもたらしてくれたのが疏水ということですね。織作さん、中瀬さんのあれ、見られていていかがですか。

**織作峰子氏** はい、いろんな、そうですね、歴史の中で、いかに重要な役目を果たしているかというのを感じましたし、私は今は原風景としての疏水とか、共生のための疏水が大事であると思うんですが、でもやはり本音を言いますと、農業生産のための疏水であってほしいなと思うんです。これは、私もいろいろな国に行きますけれども、みんなすごく自慢げに自給率100%、自給自足100%、例えば、トルコもそうですしね、商品によっては、例えばスイスなんかだとワインは100%、自分の国でつくって消費するというか、外に出ることはないんですけれども。そうなんで、やはり自分の国のものは安心じゃないですか。やっぱり自分の国で作ったものを自分たちが食べるというのが自然のことだと思うんですよね。大幅に減反をしたときに、私はあのときすごいショックでした。あれ以来、ちょっと、がたがたがたといういろいろなってきた、それで遊ばせて、雑草が生えている田んぼを見ると本当に痛ましい。せめてレンゲを植えるとかね、何かしてほしいなと思いながら、いつも見ているんですけれども、共生とかということでもコミュニティの場とすることは、いろいろこれから知恵を持って考えることはできると思うんですけれども、どうやって、その農業生産を、これからもっと少しでも活発にしていけるかというのは、私はすごく大事だと思うんです。

それから、農家の花嫁とか募集とかやっているじゃないですか、ああいうのもじゃんじゃん頑張って、農業への魅力を感じる若者が増えてくださるといいなというのは、ちょっと疏水から、私、外れるかもしれないんですけれども、そういう若い人たちが、また、疏水を守って、それによっておいしいものがつくれて、みんなが安心・安全なものをいただけるということが

一番大事だと思うんですけれども。

**林 良博氏** さっき織作さんが見せになられたスイスの、後ろの山は、あれは。

**織作峰子氏** アルプスですね。

**林 良博氏** ですね、すばらしい光景ですがあの国はですね、羨ましいなと思うのは、第二次世界大戦のとき、あそこ、今でもそうですけれども、永世中立国でしたので、何としても食料は自給しなければならない。そのとき農民も、物凄く頑張ったんですよ。そのことを今でも忘れない。日本は、今も覚えているかなというのは、3年前のことを忘れる可能性がありますので、非常に国民性もあるんですよ。あそこは、例えば500万円の年収があると何とか生活が、最低限の生活は、文化水準は同じところは、場所によってはですね、国境を守るような位置にある農家には100万円は農産物の売上、あとの400万円は国からの補助金、ほとんど公務員みたいな生活をしているわけなんですけれども、そういうことができるということは、やはり国民全体が農業者に対して、そこで頑張ってくれているということ、例えば、中山間地の本当に大変なところで頑張っている人に、そこまで日本できるかと、大変難しいところもあるんですが、食料農業農村基本計画というのをつくりまして、これが50%自給にするんだと。食料は50%にするんだと、40%から10%上げると、そのためには何をしなければいけないかということなんですけれども、一つは、この日本は水辺の国で、本当に豊かな水をうまく制して、先ほどお話ししましたけれども、水って非常に不思議な力を持っていると同時に、井戸知事がおっしゃるように怖い存在、それをうまく制御して水田、これが一番だと、ところが日本は生産調整しなきゃいけないほどお米が過ぎるところがあるんですが、この中で何としても50%自給するためには、そのお米以外のものをつくる必要がある。それこそ農地を水田以外の活用できるような、やっぱり改良をしな

きやいけないですし、水をどう制御していくか、つまり水の制御を、今度また、新たな段階での制御というのが必要になるわけで、そういったことに対して一定の予算というか、かなりの予算を日本国民が投与してくること、これだけ厳しい財政で消費税がどうこう言っているようなときではありますけれども、それだけの予算を何としてでも農業関係に確保していただかないとですね、今、織作さんがおっしゃったように、スイスよりも、今、自給率が低いんですよ。スイスというのは、日本の中山間地を全部集めたらスイスになるんじゃないかなという、そういう国でですね、日本より自給率が高いというのは、どんなことなんだろうかと思うんですけども、その少しでもスイス、美しい光景においては負けないと思うんです、光景ではですね。ぜひ農業的にもそうなってもらいたいという気がいたします。

中瀬さんの御専門は、もともと農業土木なんです。それから、造園という人工的な美しさと、自然の美しさという、これ織作さんの写真を通じて感じておられるところですが、農業土木、あるいは農業工学といったらいいのか、科学的な面からいって、日本人は一時期、人工的なものに、すっかり嫌いになってしまった時期が、農村に行ってコンクリートが打ってあると、それだけでも、何か見ただけで嫌だという感じがありますが、さっきの織作さんの写真、非常にうまく人工的なものと自然が調和しているような感じがしたんですが、造園というのは、どういうわざなんでしょう、造園というのは庭を造るものですから。

**中瀬 勲氏** 基本的にはなじませるという、なじみを作るんですね。折り合いをつけるという、そういう人工物と自然物の。だから今日の写真でも、農業土木の、構造物を非常にほめますのは、時間がたてばたつほど地域になじみますね。だから、要は農業土木というのは、多分コンクリート構造物めっちゃくちゃ多く造った

と思うんですよ。そうすると、時間がたてばたつほど地域になじんで、カビやコケがついて、結構いい雰囲気になってきますよね。多分、あれ造園と一緒に発想だと思うんですけどね。

**林 良博氏** そうすると造園は、20年後、50年後のことを想定して造る。人工的なものを造るという、なじませるために。でしたら、頭首工なんかも、私すごくいい感じの頭首工と、ちょっとここに、こんな感じの建物似合わないんじゃないかなと思うのと、両方あるんですが、ぜひ50年後のことを考えて、50年後には物凄く何か、ある意味、これがないと、この景色は成立しないというような、そういう頭首工の存在。頭首工、御存じですよ、農業用水、疏水の水を取り入れるという天然の川から。

**織作峰子氏** そういう構造物というのは非常に大事ですね、何げなく造る方が、あまり環境を意識していなくて、例えば、そういうときに、はやりの素材とかを使ったりされて、例えば、いつかインターロッキングがすごくはやっていました。私は大嫌いなんですね。水はけがよくて、構造的にはすごくいいんだと思うんですけども、情緒がないんですよ。雨が降ったときにヨーロッパのほうの、きらきらとモノクロの写真撮ったら、すてきな、ああいうイメージのものがいいんです、インターロッキングの家というのは、でもあれは一斉に日本中、インターロッキング、公園から何から全部なったときに、あれっと思って、やっぱり私の考えでは時代、年数たつごとにプラスのほうに変換していく素材を使ってほしいんですよ。石でも木でもです、味わいに変わるんです。でも化学物質というか、例えばプラスチックとかは、もうマイナスのイメージにしかならないんですよ。味わいがついてきません。ですから、年代を経るごとに味わいの出てくるデザインであったりとか、素材であったりとか、そういうもので建造物、建築物を造っていただきたいなど、いつも思うんですけども。

**林 良博氏** 今日も、そういう関係者の方がたくさん来ておられますので、ぜひお願い申し上げます。50年後の、どういう思いがあるかということ想定して素材とデザインをお考えいただけたらもっと疏水が人々に愛されると思います。

**織作峰子氏** ルーブル美術館のガラスもね、ピラミッド、あれだって市民からの応募とか、いろいろなものを総合して、ああいう形になったんですけども、もっと住民参加型で、例えば子供たちにもデザインを募集して、送ってもらって選ぶとか。何か、みんな地域の人たちがこぞって参加できるような、気がついたら建っていたじゃなくて、やはりその地域で皆さん納得したものをつくるのが大事ではないかなと思うんですね。

**林 良博氏** 造園は、そういう子供たちの応募でつくることはないのでしょうか。

**中瀬 勲氏** いや専門家の兵庫県の風景学習を環境学習に取り組んでいただきました。

**林 良博氏** じゃあもうそういうのをやっておられるんですか。

それにしても、このいいものをつくらうと思うと、若干お金が普通よりも余計にかかってしまう。今このような国家財政を見ますと、決してギリシャの二の舞になるような、スペインの方はどうなるんだと、こういう話で、どうしても考え方が萎縮、どんどんせざるを得ない、たくさんの借金を国が長年にわたって払ってきたものですから、困るんですが。その中にあって、平成2年、ちょうど今から20年前ですけども、平成2年のときと、今22年を考えると、農業者の所得、農業者全体が稼いでいるお金が、あの当時18兆円あったんですね、農業所得というのが。今9兆円を割ってしまったんですよ。つまりこの20年間の間に農業所得が、ありとあらゆる農林水産業所得ですけども、半減しちゃったんです。だから、これは私たちが一方で、この20年間で何が起きたかと

いうのは、疏水の価値をもっと多くの国民の人に知ってもらいたいと思っていたにもかかわらず、20年前はほとんど、それを知らなかった。20年後の今はですね、あの当時に比べて、疏水を含めて、いろいろな農業の価値については、多くの方が価値に気づきつつある。ちょうど反比例している感じはあるんですね。そういう状況の中で、これから自給率を高めていき、なおかつ、いい農産物を消費者の方は選択していただくという。そういう中で、やっぱり疏水が大きな役割を果たしているという、そういう向上が必要ではないかなと思うんですが。

**中瀬 勲氏** そうですね、ぜひそういう、要は大きい意味でのグローバルな経済活動と同時に地域循環型の話、あるいは中山間と下流域との連携とかね、そういう話を先生、議論したいですね。

**林 良博氏** この兵庫県は瀬戸内海と、それから日本海、神戸を中心にした大都会と、私は2週間に一度お伺いしています青垣のほうの中山間地で、かつては林業が非常に盛んで、今からの林業は大変だという。農家に行けば、我々は聞こうとしてたら冬おいしい蟹という、本当に日本を全部、この県の中に抱え込んだようなところなんです。ここで日本の将来のありべき姿を、この県で実現されつつあるということが、まず、大変ありがたいことだなというように思います。

最後これです。残された時間が三、四分になってしまっているんですが、それぞれ織作さん、何か最後に言い残されたことなどはありませんか。

**織作峰子氏** 水という、大きくとらえて、今後、水戦争が起きるんじゃないかなという話もあるぐらいで、中国も人口が増えてきて、インドもそうですけれど、いろいろな国で基本となる水がいろいろなものに必要になってきて、水がなくなる。どうやって水を確保するか、戦争になるのではないかとというぐらい水というも

のが非常に、これから、特に注目されていくんじゃないかと思います。

ですから、水をいろいろな工夫によって人々に潤いを持たせたり、そして、食料生産につなげたりということ、もう既に今からいろいろなことを考えていかなければいけないと思うんですね。それを考えつつも、住民たちが憩える水辺、水のイベントとか、いろいろ考えたり、やらなくちゃいけないことは本当にいっぱいあると思うんですけれども、写真家の立場としましては、ビジュアルですね、見て美しい、憩える風景をつくるために、なおかつ生産にもつながるとい、そういうような疏水を、ぜひ考えていただきたいと思いますね。

ちょっとした花を植えるとか、ほんのちょっと配慮で大変印象が変わってくると思うんですね、ですから、これからはますます、その先頭に立って、兵庫県、頑張っていただけたらいいなと思います。

**林 良博氏** ありがとうございます。

私たちは、今、写真という武器を手にして、つまり行かなくても、そこものを見れる。それはいい、少し想像力というか、そういうものがなくしてる中で、写真をきっかけに訪れてみたりとか、そういうことができるようになったという意味では、ぜひこういうものを、疏水は、撮り続けていただきたいと思います。

中瀬さんは、最後に言い残されたことはありませんか。

**中瀬 勲氏** お時間がないのにすみません。

私、子供のころ親父に、いやというほど水掛水車を半日ほどずっと回してたんですけども、親父が下流から水路に入れて、親父が水路に入れたものを、私が水路から田んぼへ入れるという、それを今、思い出していたんですけども。今それは完全にパイプライン化されて自由に水が入るようになりました。ところがよく考えてみると、かつての我々の水に関する地域社会の受けた知恵、それから自然との水との関

わり合いの知恵、技術の知恵、これがひよっとしたら我々のところから、どこか離れていって、どこか水利組合に任せておいたらできるような世界に、今はどうも移行しているんですよ。そういうのは農業をやっている各人、各人も、話から組織のだれかがやってくれるという話を言っているんですね。そういうのは、かつて我々の持っていた、農業の持っていた運営の、要はマネジメントの知恵というのがどんどん減っていったんじゃないかなと。ちょうど平成2年から丸20年ほどたちましたけれども、この間にすごく近代化されたおかげで、みんなが持っていた知恵は、わあっと消えつつあるかもしれない。それを再構築しながら新たな方向に疏水というのを持っていくんかなという、全員間口に情報を集めてやる必要があるかなと、最後にこれを入れておかないと博物館に帰ったらしかられますので、疏水というのは生物多様性の原点でございまして、環境省が言ってる第二の危機を、これも救う、一番の目玉となると思いますので、ぜひよろしくお願いします。



**林 良博氏** ありがとうございます。一番最初に申し上げましたように、日本人のいいところでもあり、悪いところでもある、すぐ忘れてしまう。ど忘れでもありません。今年の10月、COP10が名古屋で行われますが、COP10が終了する10月22日からは場所を豊岡に移して国際会議。

**中瀬 勲氏** 先生、左下が小野市きすみの、これが県の農業土木です。一部栽植水路を自然

風につくられている。

**林 良博氏**　　そうですか。

それで何といいますか、忘れっぽいということは、いい面でもあるんですが、やはり疏水、一番最初に農業高校の生徒さんがやられましたように、人は忘れてはならないものもあるわけで、水に流してはいけないものもあるということですので、ぜひこういったフォーラムを毎年やっていただき、それまた、先人の偉業を決して忘れないで、そして、さっきの疏水の役割を再確認する。これはもう最善、忘れなくて再認識して、それでさよならじゃ、それでおしまいというんじゃ何もならなくて、それじゃ何をやる。それを再確認した上で何かをするわけですが、それは今、中瀬さんおっしゃたように、いろいろな方が疏水に関わるような仕組みづくりというのは、ますます必要になるんじゃないかというふうに思います。疏水、そして、ため池の先進県であります兵庫県で疏水フォーラムが行われましたことを心から御祝い申し上げますとともに、今日、話題提供して下さいました中瀬さん、織作さんに感謝申し上げますと思います。

どうもありがとうございました。